２０２３．１１．２４（日）使徒２０：１７～２１

20:17 パウロはミレトスからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼び寄せた。
20:18　彼らが集まって来たとき、パウロはこう語った。「あなたがたは、私がアジアに足を踏み入れた最初の日から、いつもどのようにあなたがたと過ごしてきたか、よくご存じです。
20:19　私は、ユダヤ人の陰謀によってこの身に降りかかる数々の試練の中で、謙遜の限りを尽くし、涙とともに主に仕えてきました。
20:20　益になることは、公衆の前でも家々でも、余すところなくあなたがたに伝え、また教えてきました。
20:21　ユダヤ人にもギリシア人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰を証ししてきたのです。

＜説教＞

第３回伝道旅行中のパウロは、当面の目的地であるエルサレムに向かい、ミレトスまで来ていました。ミレトスはエーゲ海に面し、もう少し行くと地中海に出ようかという所にあった町でした。エペソの南、およそ 60 ㎞にあり、アジアではエペソに次ぐ第二の町でした。既に学んだように、パウロはエペソで２年と３ヶ月の間（31 節では「３年の間」とも言っています）過ごし、福音を宣べ伝えました。それで〈アジアに住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞いた〉(19:10)のでした。

そんなエペソの近くにまた来たのですが、パウロは〈できれば五旬節の日にはエルサレムに着いていたいと、急いでいたので〉(20:16)エペソまで行くことはできませんでした。それでパウロは〈ミレトスからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼び寄せた〉のです(17)。それは、エペソの教会の長老たちにどうしても伝えておきたいことがあったからです。「私の顔を、あなたがたはだれも二度と見ることはないでしょう」(25)と言ったように、実際に会う機会としてはこれが最後という思いがありました。なお、このおよそ３年後にはローマの獄中から「エペソ人への手紙」をパウロは書くことにはなります。また更にその後に「テモテへの手紙第一、第二」も書くことになりますが、そのときテモテはエペソの教会で牧師として働いているので、その手紙からもエペソの教会の様子が想像できます。更に言うと、使徒ヨハネはエペソで「ヨハネの手紙第一、第二、第三」を書きました。その「黙示録」2 章 1 ～ 7 節にはエペソの教会に向けたイエス・キリストのみことばが記されています。そのようにエペソの教会というのはキリスト教会を代表するような教会でした。そんな教会から集まって来た〈長老たち〉(28 節では「群れの監督」〉にパウロは「お別れの説教」をするのです。彼はまずエペソで自分がどのように働いて来たかを語りました(18 ～ 21)。

「あなたがたは、私がアジアに足を踏み入れた最初の日から、いつもどのようにあなたがたと過ごしてきたか、よくご存じです」と言います(18)。パウロが言うことは長老たちも知っている事実だというわけです。〈アジア〉と言ったのは、エペソがアジアを代表する最大の都市だったからでしょう。〈最初の日から、いつもどのようにあなたがたと過ごしてきたか〉、それは〈主に仕えて来ました〉という一言に尽きるとパウロは言うのです。

パウロは主イエス・キリストに仕える僕（しもべ）、奴隷として、初めから終わりまでいつも過ごして来たのです。確かに〈あなたがた〉、エペソの教会を建てあげ、教会、〈あなたがた〉に仕え、奉仕しました。しかし、パウロの主（人）は、エペソの教会の人々ではなく、また自分自身でさえもなく、文字通り主イエス・キリストでした。主のみことばに聞き、主に教えられ、主の御霊、聖霊に導かれ、主にのみ従ったのです。もちろん、全力を尽くし、努力しましたが、それは人に気に入ってもらうためではなく、「よくやってるね、すごいね」と人から褒められたり認められるためでもありませんでした。また、自分で自分を「よくやった」と褒めて満足するためでもなく、自分が掲げた目標を達成して満足感を味わうためでもありませんでした。むしろその反対です。別の言葉で言うなら、「自分を捨てる」ということでした。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」（ルカ 9:23。cf.マタイ 16:24、マルコ 8:34）と言われた主イエス・キリストに聞き、従うことです。自分の内にある「肉の思い」、つまり主のみこころに適わず、逆らう考え、願い、要素を一つ一つ除き、殺して行くことです。自分であれ他人であれ、人の栄光を求めるのではなく、主なる神、イエス・キリストの栄光が現れることを願い求めることです。そのために自分を捨てる、つまり自分を低くすることです。それが、ここでパウロが言っている〈謙遜の限りを尽くし〉（19）ということです。セールスをする人が腰を低くして、相手を持ち上げて気分を良くし盛り上げて売り上げ、成績を上げるみたいなのとは言うまでもなく、全然違います。〈アジアに住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞いた〉（19:10）、〈主のことばは力強く広まり、勢いを得ていった〉（19:20）のは、パウロが本当の意味で〈謙遜の限りを尽くし〉て主のため、〈何をするにも、すべて神の栄光を現すために〉（Ｉコリント 10:31）主のことばを宣べ伝えたからにほかなりません。

エペソでの〈ユダヤ人の陰謀〉のことは 20 章 3 節にしか直接は書かれていませんが、〈ユダヤ人の陰謀によってこの身に降りかかる数々の試練〉（19）と言うので、その他にも多くあったのでしょう。それは暴力による文字通りの身の危険を感じるものだけではなかったかもしれません。つまり、イエスをキリストとして信じ依り頼むのではなく、自分の「律法の行い」に依って救われよというユダヤ人の教えも「陰謀」としてパウロの福音の敵となったと考えられます。つまり、パウロの語り教える福音から人々を引き離そう、福音を聞いて主イエスを信じたキリスト者の確信を揺るがそう、そしてパウロに反対させようという「ユダヤ人の陰謀」です。そんな陰謀にはこちらも陰謀をもって、人を多く集めたりして人間の力で対抗しようという誘惑（それも試練と言えるでしょう）も多くあったでしょう。しかしそういう人間の力や知恵に依るのでなく、そういう考えを捨てて神の力、知恵、イエス・キリストに、聖霊の力に依り頼み、もちろん心を尽くして人々に語り教え諭すことをパウロは〈涙とともに〉して、〈主に仕え〉たのです。

また〈主に仕え〉る仕え方は 20−21 節もそうです。〈益〉は、「救い」という〈益〉です。〈公衆の前で〉とは「公の場で」という意味で、〈ティラノの講堂〉（19:9）や教会での「公の説教」ということです。それに対して〈家々で〉とは「私的に、個人的に」ということです。公の説教で語った「原則」「適用」を更に一人一人の個別の問題や状況に応じて、思慮深くするということでしょう。もちろんそこには「優しさ」「思いやり」が必要ですが、それもやはり人に気に入ってもらいたいとか「いい人だ、優しい人だ」という評判を

求めてのことなら、また結果として主イエス・キリストにではなく、語り教える人に依り頼むようになってしまうなら、問題です。先に見た〈謙遜〉とは違うものです。〈神がご自分の血をもって買い取られた神の教会〉(28)に連なる神の民になるように、パウロは〈余すところなく…伝え教えて〉きたと言うのです。そのために何よりも大事なこととしてパウロは、〈ユダヤ人にもギリシア人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰を証ししてきたのです〉(21)。問題に悩み苦しんでいても〈神に対する悔い改め〉に至らない場合が多々あるので、それを何とか神に目を向けるように、神に向かって立ち返る（それが「悔い改め」です）ように語り、教え、励ます必要がありました。そして同時に、自分や他人の力、人間に依り頼むのではなく、〈主イエス〉に信頼し依り頼むこと、即ち〈主イエスに対する信仰〉へと向かうように語り、教え、励ます必要があります。

私たちも先ず自分自身が〈神に対する悔い改めと主イエスに対する信仰〉をはっきりと〈証し〉し、〈主のしもべ〉として歩んで行きたいと願い、主のあわれみを祈ります。